堀河百首題「千鳥」をめぐって

内藤愛子

『堀河百首』の冬の歌題「千鳥」を取り上げて、堀河百首詠出歌人達が、冬の季題として「千鳥」をどのように捉え、詠じているかを具体的に分析し、その特徴を挙げ、歌題の本意を考えてみたい。

『堀河百首』以前において「千鳥」は歌材として『万葉集』より詠まれているが冬季との関係のある詠歌はみられない。『古今六帖』においては、第二帖水の中に千鳥（六首）と第六帖鳥の中に千鳥（九首）の二ヶ所に分類が成されている。そのうち、第六帖鳥の千鳥の分類の中に冬季の千鳥の詠歌が一首（4462）のみ見出される。

4462おもひかねいもかり行けば冬の夜の河風さむみ千鳥鳴くなり

また、「千鳥」が冬季の歌題として初出の歌合は、永承四年十一月九日内裏歌合（『平安朝歌合大成3』136）の十二番千鳥に

左　兼房朝臣

23夕暮は空に千鳥ぞきこゆなる天の川原に鳴くにやあるらむ

右勝　内大臣

24佐保川の霧のあなたに鳴く千鳥声はへだてぬものにざりける

とある。

勅撰集について見てみると、「千鳥」を冬季の歌材として初出は、『拾遺集』（224・238）に求められる。二首は『古今六帖』にみられ、そのうち、224は『古今六帖』4462の収載歌と同じである。また、冬季の歌題として「千鳥」が初めて詠まれるのは『後拾遺集』で三首（387・388・389）ある。そのうち二首（388・389）は詞書に「永承四年内裏の歌合に千鳥をよみ侍りける」とある。

このように、「千鳥」が冬季の歌題として定着するに当って、永承四年十一月九日内裏歌合が多大な影響を与えたと考えられる。また、「千鳥」が歌題として定着したのは比較的新しく、新寄な歌題であることが知られる。

「千鳥」については、既に、有吉保氏の詳細なご論考があり、そのご論考の中で有吉氏は「千鳥の歌が冬部の歌題においても、内容的にも決定的な位置を獲得するのは『堀河院御時百首』にはじまるとみられる」と指摘している。[1]その有吉氏の調査分析を基にして堀河百首題「千鳥」の特徴を考察してみると次のようになる。

『堀河百首』において、「千鳥」の歌題がどのように詠まれているか調査し、その特徴を挙げてみると、千鳥の鳴く声に主眼をおき、聴覚的表現を中心に捉え、叙景的に描いている。しかも、時間的には、夜間を設定した歌が十六首のうち十首をしめ、そのうち、明け方が一首、夕方が一首である。また、浦、浜、沖のような海に関連した歌枕、地名、名所を設定した詠歌が十二首の多数をしめ、川、河原のように河川に関連した歌枕、地名が四首みえ『堀河百首』詠出歌人達は、千鳥を河川と結び付けて詠じるよりも海との関わりで千鳥を詠じる歌が中心を成していると言える。そして、「風」が歌材

として詠まれた歌が十六首のうち七首をしめている。

しかも、「千鳥」と場所の設定に関しては、歌枕、名所、地名に拠った詠歌が十六首中十二首をしめている。それらの歌枕、名所、地名を挙げてみると、「志賀の浦」(977)「明石の浦」(978・980)「浪逆の浦」(982)「与謝の浦」(983)「雄島ヶ磯」(984)「猪名の湊」(986)「吹上の浜」(988・991)「大井川」(985)「佐保川」(987・989)である。そのうち、「浪逆の浦」と「猪名の湊」は、管見の範囲では『堀河百首』成立以前に詠歌が見出されず、『万葉集』のみに詠歌が見られることから少なからず『万葉集』に典拠を求めた歌枕、名所、地名と言えるであろう。

これらの歌枕、地名、名所のうち、『堀河百首』以前に「千鳥」と詠まれた歌枕、名所、地名は「佐保川」のみであり、それ以外は「千鳥」との詠歌には見出すことのできないものである。

このように、十六首中、十二首までが歌枕、地名、名所を詠み込んでいることは、『堀河百首』の歌題「千鳥」における詠歌の特徴の一つとして挙げてよいであろう。

堀河百首題「千鳥」における歌枕、名所、地名ごとに具体的に検討してみることにしよう。

まずは、「志賀の浦」を取り上げてみよう。「志賀の浦」は近江の国の歌枕で、『万葉集』より詠じられている歌枕、地名である。『堀河百首』においては三首(977・1273・1275)みられ、そのうち、歌題「千鳥」は一首(977)で、その他の二首(1273・1275)は歌題「恨」の歌でしかも、「浦」に「恨」を懸けている。

977志賀の浦の松吹く風のさひしきに夕浪千鳥たちゐなくなり
(藤原公実)

1273ささ浪や志賀の浦風うらめしと思ふはかひも渚なりけり
(源師時)

1275人知れずみるめもとむと近江なる志賀の浦みてすぐるころかな
(藤原基俊)

「千鳥」の歌(977)は、『万葉集』268の人麻呂の近江朝遷都の詠歌を本歌とし、その詠歌に発想典拠を求めている。

268淡海乃海　夕浪千鳥　汝鳴者　情毛思努尓　古所思

この人麻呂の歌の初句目の「淡海の海」を同じ近江の国の歌枕である「志賀の浦」に替え、第二句目「夕浪千鳥」はそのまま下二句目に詠み入れたもので、人麻呂歌を強く意識したものと捉えられる。

「千鳥」と「志賀の浦」組合せによる例歌は、この藤原公実の歌(977)以前にはあげられず、この詠歌以降は「千鳥」の題詠歌や歌合歌に詠まれている。例えば『源三位頼政集』221(『私家集大成中古II 86)や元永元年十月十三日内大臣忠通歌合8(『平安朝歌合大成6』298)等である。

寒夜千鳥を観蓮か歌会に

281さゆる夜は遠さかり行志賀の浦の浪のこなたに千鳥鳴也

8空さえて志賀の浦風海吹けば夕浪千鳥たちゐなくなり

このように、藤原公実の歌(977)と少なからず影響関係が認められる例歌であろう。

また、「千鳥」の歌題の中で、『万葉集』の詠歌を発想の典拠としているものとして藤原顕季の歌(981)が挙げられる。

981夜くたちに千とりしはなく楸生ふる清き川原に風やふくらん

この981の詠歌は、『万葉集』(930)の山部赤人の歌に典拠を求めることができる。

930鳥玉之　夜乃深去者　久木生留　清河原尓　知鳥数鳴

この930の歌の下三句をそのまま句の順序をさし替え、しかも、第一句目の「夜くたち」もまた、『万葉集』第十九巻「夜裏聞千鳥鳴二首」

の大伴家持の歌（4170・4171）に見出せる。

4170夜具多知尓　寝覚而居者　河瀬尋　情母之奴尓　鳴知等理賀毛
4171夜降而　鳴河波知登里　宇倍之許曾　音人母　之努比来尓家礼

「夜くたち」は、『万葉集』を典拠とした歌語と考えられる。このように、藤原顕季の千鳥の歌は『万葉集』の歌語を用い、新しい趣向を求めたものと受け取れるだろう。

次に、『万葉集』に例歌が見出される「佐保川」について検討してみよう。「佐保川」は、大和の国の歌枕で、「千鳥」において、「佐保川」を詠じた歌は次の二首（987・989）である。

987霧たちてわたせもみえぬさほ川のしるへは夜半の千鳥なりけり
（藤原基俊）
989よやさむき友や恋しきねてきけはさほのかはらに千鳥鳴くなり
（隆源）

この二首は、いずれも「千鳥」と「佐保川」が詠まれ、この組合せは『万葉集』に多数の例歌がみられる。特に、『万葉集』第七巻の「鳥詠」という詞書のある詠歌が三首排列され、そのうちの二首（1127・1128）は「千鳥」「佐保川」の組合せの詠歌であり、1128は、夜更けに鳴く千鳥を詠じている。

このように、「千鳥」「佐保川」「夜」の組合せは『万葉集』以来の伝統的な組合せに拠る詠作方法と指摘できるであろう。

1128佐保川尓　小驟千鳥　夜三更而　尓音聞者　宿不難尓

藤原基俊の詠歌（987）のように「佐保川」と「川霧」と「千鳥」の組合せは、勅撰集において『古今集』（361）より例歌が挙げられ、それらは「紅葉」を主題とした詠歌に数多く見られる。このような組合せの詠歌は、秋部に排列され、秋季を意識したものと言える。

361千鳥なくさほ河きりのたちぬらし山のこのはも色まさりゆく

だが、「佐保川」「川霧」、「千鳥」という組合せパターンで冬部に排列され「千鳥」を主題とした歌として勅撰集の初出は、『拾遺集』にみられ、それは紀友則の詠歌（238）であり、『古今六帖』にも収載されている。

238ゆふされはさほのかはらの河きりに友まとはせる千鳥なくなり

この詠歌は、先に指摘したように、勅撰集において「千鳥」が歌材として冬部の初出の歌であり、歌題として初出の『後拾遺集』の冬部には三首（387・388・389）が集中して排列されている。その三首は、いずれも歌枕、地名、名所が詠み入れられているが夜の千鳥を詠じていない。

その三首のうち、二首（388・389）は「永承四年内裏の歌合にちとりをよみ待りける」という詞書きが付いてる。しかも、388の詠歌は、「佐保川」「千鳥」「霧」の組み合せに拠っている。

388佐保川のきりのあなたになく千鳥こゑはへたてぬものにそありける

このように、『堀河百首』の藤原基俊の歌（987）の「千鳥」「佐保川」「霧」という歌材の組合せは、『万葉集』以来詠み継れた伝統的なパターンを基としながら夜に鳴く千鳥を詠じている。また、隆源の歌（989）も同様に『万葉集』に歌材を求め、「佐保の川原」「夜」「千鳥」という組合せに拠って、友が恋しくなるような冬の夜の寂しさを効果的に表現し、冬季の歌題として「千鳥」を捉えている。

このように、「佐保川」「千鳥」の発想は少なからず、『万葉集』以来の伝統的な千鳥の詠歌を意識した上での詠作方法であり、夜に鳴く千鳥の発想も万葉歌に典拠を求めたと考えられ、そこに新趣向の追求を見出したと言えないだろうか。

また、『堀河百首』において「佐保川」を詠み込んだ歌が三首（116・987・1595）あり、前掲の「千鳥」の歌題の歌（987）の他に、「柳」

の歌題（116）と「祝」の歌題（1595）に見られる。

116さほ川の岸のまにまにむれたちて風に波よる青柳の糸

1595底きよみなかれたえせぬ佐保川のせぎりの波やよろづよのかす

そのうち、116の歌は「佐保川」と「青柳」の組合せに拠ったもので、その組合せによる116の歌以前の例歌としては、永承六年正月一日庚申六条斎院禖子内親王歌合27（『平安朝歌合大成3』144）の「雨中柳」に見出されるのみである。

27つくつくとふる春雨に佐保川の岸の青柳いろつけにけり

116の歌は、『万葉集』の大伴坂上郎女の柳の歌（1437）を本歌としたものと考えられるだろう。

1437打上　佐保能河原之　青柳者　今者春部登　成尓鶏類鴨

また、『堀河百首』詠出歌人である藤原公実、藤原顕季が作者としてみられる寛治五年十月十三日従二位親子草子合6（『平安朝歌合大成5』219）において、「柳」の歌題に「佐保川」と「柳」の組合せの詠歌が見られる。

6朝まだき佐保の川べを見わたせば染めかけてけり青柳の糸

このように、『堀河百首』詠出当時には「佐保川」と「柳」の組合せで詠まれていたと受け取れるであろう。しかも、その組合せは万葉歌に典拠を求めた新しい詠作方法の一つであり、今までに見られない新しい組合せに拠って「佐保川」の発想領域の拡張と考えられるだろう。

次に、河川の歌枕、地名、名所である「大井川」を取り挙げてみよう。「大井川」は、山代の国の歌枕であり、勅撰集においては『古今集』よりみられ、「筏」「井堰」や「紅葉」の歌語と共に詠じた例歌が多く挙げられる。殊に、「大井川」は、屏風や障子の画題としてみられ、屏風歌や障子歌や名所題として詠じられている。「大井川」はその後の影響に拠って、イメージ化が成されていった歌枕、地名、名所と言えるだろう。

例えば、『恵慶集』192（『私家集大成中古Ⅰ』104）や『能宣集』192（『私家集大成中古Ⅰ』117）にあり、各々の詞書から屏風歌や障子歌であることが知られる。

大井にいかたくたす、紅葉みる人あり

192大井河いかたのさほもさすまなくにしきにみゆるなみのうへ哉

秋大井川

192大井川うける紅葉はいかたしのをのつしつくを時雨とやおもふ

勅撰集においても、やはり「大井川」は「紅葉」「筏」「井堰」と共に詠じられ、「大井川」は紅葉の名所という関係から秋季の詠歌が数多く見られる。そのような組合せによる秋季の詠作が多数を占めている。

『堀河百首』において、「大井川」を詠み込んだ歌として三首（469・985・1384）あり、そのうち二首（985・1384）は「筏」と共に詠じられている。

469大井川せせにひまなきかかり火とみゆるはすたく螢なりけり（藤原顕季）

985おほゐ川くたす筏おとろきてゐせきにきゐる千鳥鳴くなり（源師時）

1384おほゐ川みなわさかまく岩ぶちにたたむ筏の過きかたの世や（源俊頼）

これらのうち、「千鳥」の詠歌（985）は師時の作で、この詠歌のように「大井川」と「千鳥」の組合せの例歌は管見の範囲においてあまり見られず、わずか『古今六帖』に一首（1634）検索されるのみであり、それは、第三帖の「しがらみ」に分類されている。

1634大井川心しがらみかみしもに千鳥しば鳴く夜ぞふけにける

この詠歌は、「大井川」と共に、夜に鳴く千鳥を詠じている。また、『堀河百首』以降にも例歌が見当らず、師時の歌（985）は、少なからずこの詠歌の影響を受けたと察せられ、「大井川」と「千鳥」の組合せは定着化せず一過性のものと指摘できよう。

また、「螢」の詠歌（469）における「大井川」と「螢」組合せも、やはり以前には例歌を見出せず新しい発想の詠歌を言える。その組合せによる詠歌が、永長元年五月廿五日権中納言匡房歌合4（『平安朝歌合大成五』236）の四番「螢」に

4 高瀬舟かがりもささず大堰川みぎはの螢ひましなければ

とあり、「大井川」と「螢」という組合せは『堀河百首』詠出当時には注視されていた詠作と言える。しかも、『堀河百首』以後の「螢」の題詠や百首歌に詠じられていることから察すると、少なからず影響を与えてたことを示している。

このように、『堀河百首』詠出以前に詠まれていない、「大井川」と「千鳥」または「螢」との組合せは、「大井川」の歌枕、名所としての発想領域の拡がりと展開を認められるだろう。

『万葉集』の詠歌に典拠を求められる歌枕、名所、地名として「浪逆の浦」と「猪名の湊」がみられる。いずれも、管見の範囲では『堀河百首』成立以前には例歌が見られず、『万葉集』のみに例歌が見られることから『万葉集』を典拠とした歌枕、名所、地名と考えられるであろう。

「浪逆の浦」を詠じた歌（982）は、

982 あづまなるなさかの浦に塩みちて有明の空に千鳥しはなく

とあり、源顕仲の歌一首のみである。「浪逆の浦」は、『万葉集』第十四巻の東歌の常陸の国の歌に排列された一首（3415）に

3415 比多知奈流　奈左可能宇美乃　多麻毛許曽　比気波多延須礼阿杼可多延世武

とあり、「浪逆の浦」は現在の茨城県の南東部、北浦の南方、鹿島町、潮来町から賀村、息栖にかけてのあたりを言うようである。「浪逆の浦」を詠じた歌は、管見の範囲では、この一首のみで、例歌が見当らず、新奇な歌枕、名所、地名である。また、従来詠まれていない歌枕、地名を『万葉集』の東歌に求め、それに拠って新奇さを求め、独自性を追求した詠作と捉えられる。「浪逆の浦」は、この源顕仲の詠歌以外に例歌がみられないことから、後世に影響を与えるような歌枕、地名に成りえなかったと言える。

次に、「猪名の湊」について検討してみよう。『堀河百首』において、「猪名の湊」の詠歌（986）は、藤原顕仲の歌である。

986 風さむみ夜や深けぬらんしながとり猪名の湊に千鳥しば鳴く

「猪名」は、摂津の歌枕、地名であり、『万葉集』以来「猪名」の枕詞である「しなが鳥」と共に詠じられている。この「猪名の湊」も「浪逆の浦」と同様に、この詠歌以前に例歌が見出せず、『万葉集』（1193）に一首詠まれているのみの歌枕、地名、名所である。

1193 大海尓　荒莫吹　四長鳥　居名之湖尓舟泊左右手

既に、指摘しているように『堀河百首』において「猪名」に関連した歌枕、地名、名所が多数詠まれていることから、「猪名」は『堀河百首』の詠出歌人達に注視され、多様化された歌枕、地名、名所である。[2]「猪名の湊」もその中の一つであり、『万葉集』に出典を求めた歌枕、地名、名所であり、新奇な歌枕、地名、名所に拠って新鮮さを示した詠作と言えるだろう。

この藤原顕仲の詠歌以降にも「猪名の湊」は「千鳥」と共に詠まれており、しかも『堀河百首』の影響関係が認められる歌として、『林葉集』439（『私家集大成中古Ⅱ85）がみられる。また、歌枕、地名、名所として「猪名の湊」は、例えば『千載集』312等が挙げられ

る。

439千鳥なくゐなのみなとに風さえて波まにやとる有明の月

312浮寝するゐなのみなとに聞ゆなり鹿の音おろす峰の松風

このように、「猪名の湊」は、『堀河百首』に詠まれた以後、歌枕、地名、名所として詠まれた例歌が見られることから、少なからず、この詠歌を契機にして歌枕、地名として定着していく傾向が推察される。

次に、『堀河百首』において、「雄島ヵ磯」を詠じた歌は源俊頼の歌（984）のみである。

984あなしふくを島ヵ磯のはま千鳥岩うつ浪にたちさわくなり

「雄島ヵ磯」は、陸奥の国の歌枕であるが、勅撰集において初出は『後拾遺集』（828）の源重之の詠歌にみられるのみである。[3]

828松島や雄島の磯にあさりせし海人の袖こそかくは濡れしか

この詠歌以外に「雄島ヵ磯」の詠まれた例歌が見当らず、新奇な歌枕、地名と言えるであろう。また、「あなし吹く」は、多く北西方向から吹く風のことで、本来は悪風、危難をもたらす風といったものらしい。『俊頼髄脳』には、「あなしといへる風あり。いぬゐの風とかや」とあり、歌語として初出は『後拾遺集』（532）に見られる。

532あなしふくせとのしほあひに舟出してはやくそすくるさやのかたのやま

だが、『堀河百首』において「あなし吹く」は、同じ冬季の歌題である「寒蘆」の源顕仲の詠歌（966）にみられる。

966よもすからあなし吹くなりなにはがた塩あしに浪の花やさくらむ

このように、「あなし吹く」は『堀河百首』詠出当時に注目された歌語と言えるであろう。源俊頼の歌（984）は、「雄島ヵ磯」という新奇な歌枕、地名、に注目し、「あなし吹く」という新奇な歌語に拠った独自の創作意図が窺える。

「雄島ヵ磯」は、源俊頼の詠歌以後、影響関係が認められる『林葉集』663（『私家集大成中古Ⅱ』85）に「月前千鳥」という歌題に

663月きよみ雄島ヵ磯のいそなくさなにのくもりをあさる千鳥そ

とあり、「月」「千鳥」と共に「雄島ヵ磯」が叙景的に詠じている。このように、「千鳥」の歌題において「雄島ヵ磯」を詠じていることから、少なからず源俊頼の歌（984）を念頭に置いた詠歌と言えるだろう。

また、「雄島ヵ磯」や「雄島」は、前掲の源重之の歌（828）より、「海人」「袖」「松島」と共に詠じた例歌が『千載集』（884）や『新古今集』（933・948）に数多く見られる。

828見せはやな雄島のあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす

948松ヵ根の雄島ヵ磯のさ夜まくらいたくなぬれそ海人の袖かな

このように、「雄島」や「雄島ヵ磯」は、「千鳥」と共に詠まれるより、「海人の袖」等の源重之の詠歌の影響を強く受けた歌枕、地名、名所として定着化した傾向が窺える。

『堀河百首』で「吹上の浜」の詠歌は二首（988・991）みられる。

988沖つ風ふき上の浜のさむけれは冬の夜すがら千鳥なくなり

991浦風に吹上のはまの浜千鳥浪たちくらし夜はになくなり

「吹上の浜」は、紀伊の国の歌枕であり、勅撰集において「吹上の浜」の「吹上」に「吹き上げ」を懸けた歌の初出は、『古今集』（272）である。

272秋風の吹上にたてる白菊は花からぬか浪の寄するか

「吹上の浜」は「吹上」に「吹き上げ」を懸け、「吹く」という意から「風」が連想される。この二首はいずれも「沖つ風」「浦風」というように風と共に詠まれ、伝統的な修辞技巧に拠った詠出方法で、

夜寒に鳴く千鳥を描いている。

また、『堀河百首』の詠出歌人である藤原顕季の家集である『六条修理大夫集』（『私家集大成中古Ⅱ』59）に

殿上にて、千鳥といふ題をよませ給ふ(ママ)しに

12おきつ風吹上の浦やさむからん浪立さはき千鳥啼なり

とあり、永縁の歌（988）の「吹上の浜」が「吹上の浦」になり、第四句目の「冬の夜すがら」が「浪立さわき」になっているのみで、とても類似したものと言える。『堀河百首』詠出に際し、歌人達が互いに影響し合ったと推察される一首であろう。

『堀河百首』の詠出時期と重なると推測が可能な時期の長治元年五月廿一日因幡権守重隆歌合15（『平安朝歌合大成』248）の「千鳥」に

15沖つ風吹上の浜に朝な波の居る間に千鳥なくなり

とあり、『堀河百首』詠出当時は、「沖つ風」と「吹上の浜」、「千鳥」の組み合せパターンがかなり詠まれていたと察せられる。

「千鳥」と「吹上の浜」の組合せは、『堀河百首』以前に、例歌が見当らず、『堀河百首』詠出当時には詠じられていることからすると詠出当時には注目された組合せと言えるだろう。しかも、『堀河百首』以降は「千鳥」の題詠歌に見られる。紀伊の歌（991）は『新古今集』（646）に採られ、冬歌の千鳥の歌群に排列されており、その中で「吹上」の歌枕を詠じた歌が二首（646・647）みられ、それらはいずれも定数歌の歌である。

五十首歌たてまつりし時　摂政太政大臣

647月そすむたれかはこゝに紀の国や吹上の千鳥ひとりなく也

このように、「吹上の浜」と「千鳥」の組合せパターンは、『堀河百首』の詠出時期より、「千鳥」の題詠する際の一つの組合せパターンとして定着していったと捉えられるであろう。

次に、「吹上の浜」と同様に、懸詞として用いられた歌枕である「明石の浦」を取り上げてみよう。「明石の浦」は、播磨の国にあり、『万葉集』（329）より詠まれている伝統的な歌枕、地名と言える。

『堀河百首』において、「明石」に関連した歌枕として「明石の浦」「明石の沖」がみられる。「明石の浦」の詠歌三首あり、そのうちの二首（978・980）が「千鳥」の歌題で、もう一首（1422）は「関」の歌題である。この三首はいずれも「明石の浦」の「明石」に「明し」を懸け、かなり一般化された懸詞の修辞技巧に拠っている。

978月影のあかしの浦をこぎ行けは千鳥しばなくあけぬこの夜は　（大江匡房）

980夜をさむみあかしの浦の浜風にとわる千鳥声さわぐなり　（源師頼）

『堀河百首』のこの二首以前において、「千鳥」と「明石の浦」の組合せに拠った歌は『実方中将集』229（『私家集大成中古Ⅰ』133）に連歌が一首挙げられるのみである。

月のあかく侍しに、人とものいひ侍しに、ちとりなきしかは

229はまちとりいつこになくそつきまつとといひしかは

あかしのうらとおもふなるへし

このことから、「千鳥」と「明石の浦」は、新しい歌材の組合せと言える。

『堀河百首』の詠出時期と重なると推察される時期の歌合に「千鳥」と「明石の浦」の詠歌がある。それは、永長元年三月廿二日権大納言家忠歌合（『平安朝歌合大成五』232）の十番千鳥に見出せる。

20旅寝して明石の浦の浜千鳥心ほそくもきこゆなるかな

また、『堀河百首』の影響が考えられる歌として、俊頼や基俊との交流関係がある藤原忠通の家集『田多民治集』96（『私家集大成中古Ⅱ』80）の「暁千鳥」という歌題に、

96有明の月もあかしのうら浪のうちおとろかす友千鳥かな

とあり、「明石の浦」に「明し」を懸け、しかも「浦」に「浦波」を懸け、技巧的に仕上げている。

大江匡房の詠歌（978）の「月影の明石の浦」というように、「明石の浦」と「月」の歌材の組合せに拠った歌が数多く見られる。『堀河百首』の1422においても、「月影の明石の浦」という表現がみられ、すでに、『延喜御集』16（『私家集大成中古Ⅰ』40）にも見られ、「明し」の縁語として「月」が詠じられている。

1422月影の明石の浦をみわたせは心はすまの関にとまりぬ

16月影の明石の浦になかめつゝたひなかせるは我にやあるらん

「千鳥」と「明石の浦」の組合せの詠歌は、『堀河百首』成立以降において、堀河百首題の百首歌や千鳥の関連した歌題における詠歌に見出されることから、『堀河百首』の二首（978・980）が少なからず、『堀河百首』成立以降の題詠や百首歌に影響を与えていることは確かに認められる。

「千鳥」において、「与謝の浦」を詠じたのは源仲実歌（983）である。

983橋立やよさのうら浪よせてくる暁かけて千鳥なくなり

この歌は、「与謝の浦」と「橋立」と共に用いられ、いずれも丹後の国にある歌枕、地名、名所である。しかも、「与謝の浦」の「浦」に「浦波」を懸けるという技巧を使い暁まで鳴き続ける千鳥を詠んでいる。

「与謝の浦」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集には見当らない歌枕、地名であるが、「与謝の海」もまた、勅撰集に例歌が確認できない歌枕、地名である。だが、「与謝の海」と「天の橋立」を同時に詠み入れた例歌としては、『能宣集』195（『私家集大成中古Ⅰ』117）が挙げられる。その詠歌の詞書きに「一条の太政大臣の家への障子のゑくに〳〵のなあるところ〳〵をかゝせ侍りて、人〳〵歌よみつけよと侍りしかは、よみたてまつりし」とあり、「天の橋立」の障子歌であり、障子絵の影響によった歌と捉えられる。

あまのはしたて

195与謝の海の天の橋立見わたせはかたゝなみをわくるしめかも

「与謝の海」と「天の橋立」の二つの歌枕、地名を共に用いるという構成は、障子歌や屏風歌を契機に定着し、「与謝の浦」と「天の橋立」もそこから学んだと考えられる。

「与謝の海」は、勅撰集において、『千載集』504に見出され、「与謝の海」と「天の橋立」組合せの詠歌である。(4)

504思ふことなくてやみましよさの海の天の橋立都なりせは

だが、「与謝の浦」は、勅撰集には例歌を見出すことができず、『相模集』197（『私家集大成中古Ⅱ』29）、『散木奇歌集』1231（『私家集大成中古Ⅱ』62）、『基俊集』76（『私家集大成中古Ⅱ』68）等に見られ、そのうち、『基俊集』76は、「与謝の浦」を「浦浪」と懸けた技巧用いている。

このように「与謝の浦」は、『堀河百首』詠出時期に近い頃より詠じられた比較的新しい歌枕、地名、名所と言え、しかも『堀河百首』詠出歌人達に詠まれていたことが知れる。

76おしてるやよさの浦浪うちかへし今もみまくのほしき君かな

「千鳥」と「与謝の浦」「天の橋立」の組合せの詠歌は、源仲実の歌（983）以前には見られないが、少なくとも「与謝の海」と「天の橋立」を意識し、「海」を「浦」に変えたのみとも考えられる。この仲実の歌以降、「千鳥」と「与謝の浦」の組合せによる例歌が検索されることから、この詠歌が影響を与えたと認められるだろう。例えば、『忠盛集』23（『私家集大成中古Ⅱ』74）に

暁千鳥

23よさの浦の松風さむみね覚する有明の月に千鳥なくなり

とあり、「千鳥」と「与謝の浦」は、『堀河百首』成立以降の「千鳥」の題詠歌に多数みられることから、その詠作方法の定着化を示している。

以上のように、歌枕、地名を中心にみてくると、堀河百首題「千鳥」で詠み込まれている九つの歌枕、地名のうち、「佐保川」と「大井川」を除いて歌枕、地名は、すべて海辺に関連した歌枕、地名であり、この点からしても堀河百首題の「千鳥」は、有吉保氏のご指摘のとおり、(5)海辺の千鳥の詠が多くを占めていることが知られる。

また、「千鳥」に詠じられた歌枕、地名のうち、『万葉集』に詠歌を検索し得る歌枕、地名として「志賀の浦」「佐保川」「浪逆の浦」「猪名の湊」が挙げられる。そのうち、「浪逆の浦」と「猪名の湊」はいずれも万葉歌以外に例歌がみられず、『万葉集』に典拠を求めた歌枕、地名と言える。殊に、「猪名の湊」は、『堀河百首』成立以降に歌枕、地名として定着化の傾向が窺える。また、唯一、『万葉集』において、「千鳥」と共に詠じられた歌枕、地名として「佐保川」が認められ、それ以外の歌枕、地名は「千鳥」の詠作は見出せない。

だが、「志賀の浦」「猪名の湊」「雄島ヵ磯」「吹上の浜」「明石の浦」「与謝の浦」は、『堀河百首』成立以降の「千鳥」の題詠歌や歌合歌に詠じられることから、『堀河百首』の「千鳥」の歌題の詠歌との影響関係が、歌枕、地名の点からも指摘できるだろう。殊に、「雄島ヵ磯」「与謝の浦」は、比較的に新しい歌枕、地名と言え、「雄島ヵ磯」は源重之の詠に学んだ歌枕、地名であろう。

『堀河百首』において、比較的に歌題として新しい「千鳥」は、『万葉集』の詠歌に歌材や歌枕、地名を求め、しかも、万葉歌の多大な影響関係を認められる。それは、『万葉集』(4170・4171)の詞書きに「夜裏聞千鳥鳴二首」のように、万葉歌において、夜に鳴く千鳥の詠が多くみられることから、『堀河百首』の「千鳥」歌題も、万葉歌を背景にし、夜鳴く千鳥が数多く詠まれたのではないかと推察できるであろう。また、このように歌題「千鳥」で、今までに詠まれていない歌枕、地名を組合せる詠法は新しい歌枕、地名に拠って特定の景物を与えることでその地の景色を視覚的に表現しようとする、和歌表現の創意工夫と認められるであろう。

〈注〉

(1)有吉保氏著『新古今集の研究　基盤と構成』(昭43)三省堂

(2)拙稿「堀河百首題「野」をめぐって」(「文教大学女子短期大学部紀要」第33集)参照。

(3)この詠歌は、『しけゆき』(『私家集大成中古Ⅰ』138)の「恋十」305に初二句目が「まつしまのいしまのいそに」として収まっている。

(4)『千載集』504の詠歌は赤染衛門の詠となっているが、『金葉集』三奏本515においては、馬内侍の詠となっている。

(5)注1に同じ。

引用した『万葉集』、『古今六帖和歌』は、『新編国歌大観』(歌番号も同本に拠る。)に拠った。ただし、表記については改めたところがある。